

杉田水脈擁護論

まつはしともひさ
松橋倫久

少し前の話になるが、衆議院議員の杉田水脈氏が、同性愛の問題やレイプ事件に関して、物議を醸す意見を発表している。マスコミでは一斉に叩いているが、私は彼女に反対する同調圧力の強さに、少し恐怖を抱いている。右であれ、左であれ、自分の意見は自由に表明しても良いのではないだろうか。

私はこのエッセイで、杉田水脈氏の擁護を試みたいと考えている。しかし、私自身は杉田氏のLGBTに関する論文は読んでいない。内容を擁護するのではなく、たとえ極右の、ヘイトな意見であっても、表現する自由があるということをお願いするのである。

そもそも杉田氏があのような意見を発表するのは、自民党の中の偉い議員や、自分を支持している有権者の方だけを見ているからである。自分の支持基盤を見てポジショントークをするのは、政治家としては別に普通のことだろう。この問題の本質的なところは、同性愛者は生産性がないとか、レイプ事件において女性が嘘をつけるといったことを、思想として持っている層が確かに存在しているということである。だから、杉田氏のみをつかまえて、議員にふさわしくないと試してみても仕方が無いのである。支持する人がいるから、彼女は当選できている。杉田氏の背後には、たくさんヘイトな思想を持った有権者が控えている。

しかし、私はそのこと自体はあまり問題だとは感じない。極右でも極左でも、個人がどのような思想を持ったとしても、それは自由だからだ。逆に、杉田氏に反対する同調圧力の強さには、ある種の恐怖を感じないでもない。悪魔は常に、善人の面をして近づいてくる。杉田氏の問題でも、「人権」が大切だというある種当たり前のことが、全体主義の第一歩として近づいてきているのではないか。「人権」は大切である。しかし、「人権」が持ち出されて、誰も異を唱えることができなくなれば、それは危険だ。世の中には、多様性が必要だ。様々な意見が必要だ。LGBTを、多様性を許容する観点から擁護するのであれば、極右の意見もまた許容されなければならないのではないか。LGBTを認めることは、大事であり認めるけど、極右の意見は認めないというのは、一貫した態度とは言えない。極右から極左まで、いろいろな意見があってもいい。それらを封じ込めると言うことが、全体主義へつながっていくと思えば、私は若干恐怖を感じている。

ヘイトな意見がいけないというなら、その意見がヘイトであるかどうか、ヘイトの定義は誰が決めるのだろうか。ヘイトとそうでない意見の境目をどこにするか。ヘイトかどう

かを決められる人や組織には、権力が発生するのではないか。そもそも、ヘイトな意見がいけないと決めつけること自体が、良くないのではないか。杉田氏は、極右・ヘイトの有権者のようなニッチなところを狙っているのである。それは選挙の戦略としては有りだと思われ、極右の人たちの受け皿だっただけで必要だ。極右の人たちの受け皿が全くないのだとすれば、それは民主主義として問題がある。杉田氏が当選して議員として活動できていることは、民主主義がきちんと機能していることの証とも言える。

近年では、ヘイトスピーチを禁じる条例ができたりもしている。ヘイトスピーチは聞いていて気持ちの良いものではないが、そういった意見を封じ込めることには賛成できない。ヘイトスピーチの内容が、人権を侵害するというもので、表現の自由と比較したときに、人権の侵害の程度が大きいのでヘイトスピーチを禁止しているという解釈なのだろうと思う。公共の福祉のために、表現の自由が制限されることは、理解はできる。杉田氏の場合、レイプ事件に対するコメントは、公共の電波に乗って報道されたので見たくない人も見ってしまったかもしれないが、問題になった論文は、気に入らない人は読まなければ良いだけだ。雑誌というような、影響が限定的な場所での言論に対してまで、人権の名の下に意見を抑圧することは良くないのではないだろうか。

杉田氏は、同性愛の問題やレイプ事件に関して、偏った意見を持った国会議員であることは確かである。しかし、問題の本質は、そういった偏った意見を持った議員に投票する有権者もたくさんいるということである。二〇一七年の衆議院選挙では、杉田氏は小選挙区で立候補せず、比例のみでの出馬だったため、杉田氏へどれだけの支持があったか、どれだけの人が彼女の意見に同調しているかははっきりしない。しかし、比例の名簿で上位に掲載されるということは、自民党の偉い議員の方々は彼女のことを支持しているし、そのような姿勢を示す自民党を支持している有権者が一定数いるということである。もし、杉田氏を叩く人たちが、本当にヘイトを無くしたいならば、彼女を支持しているような有権者へ向けて、メッセージなり説得なりをしなければならぬと思う。杉田氏一人をスケープゴートにしてはいけない。

杉田氏に同調する人々も、たとえば「非正規」とか「貧困」といった問題を抱えているのかもしれない。ヘイトスピーチを糾弾することは容易い。断罪することに、一種の爽快感さえあるかもしれない。しかし、ヘイトスピーチを行う側、同調する側へも寄り添うようなアプローチが、今求められているのではないか。